

一般社団法人茨城県キャンプ協会管理運営の里美野外活動センターが以下、産経新聞社に掲載されました。

(文章を抜粋・転載禁止) 「近代建築の父ゆかり PR」

キャンプ利用者回復へ『切り札』 県立里美野外活動センター (2022年からリリーアカデミーキャンプセンター)

県内キャンプ場の数は163カ所(平成30年度)と全国1位を誇る。その草分け的存在の県立里美野外活動センター(常陸太田市里川町)は昨年度、新型コロナウイルスの感染拡大で利用者が3分の1まで激減。施設を管理運営する一般社団法人・県キャンプ協会は、同センターが日本近代建築の父と呼ばれているアントニン・レーモンドの指導のもとで設計されたことを広くPRし、利用者増へとつなげたい考えだ。(文章・三浦馨水戸支局長)

コロナ過で激減

里美野外活動センターは昭和47年にオープン。標高700mの豊かな自然に囲まれた東京ドーム5個分、約28haの敷地に3つのキャンプ場と調理場、多目的広場や宿泊・研修に使うメイン施設などを備えている。

主に小中学校の野外学習やボーイスカウト、ガールスカウト、子供会といった団体のほか、家族連れなども利用。一昨年度は県内外から1万2千人が訪れたが、コロナ過に見舞われた昨年度の利用者は4千人まで落ち込んだ。

センターは平成21年度から、指定管理者に選ばれた県キャンプ協会が管理運営する。所長を務める同協会の橋本久雄さん(67)は「今年度の利用者は何とか6千人台まで回復させたい」と願う。

その『切り札』として期待されているのが、著名な建設家・レーモンドとの関わりだ。三角屋根が特徴のセンターのメイン施設や自然の地形を生かしたキャンプ場の建設設計は、東京のレーモンド設計事務所が担当。「実際に図面を引いたのは事務所のスタッフで私も手伝ったが、レーモンドがあれこれと細かく指示していた」と現在の同設計事務所社長、三浦繁伸さん(78)は証言する。

来年で開設50周年

自然になじみ、シンプルで運営維持に費用がかからない経営性がレーモンドの建設哲学だった。「そうしたスタイルは里美のセンターにも十分生かされている」と三浦さん。施設が来年、50周年を迎えることについて「世の中でどんどん建物が壊される中ですごいこと。建築家冥利に尽きる」と語る。

一方で施設の老朽化も目立つ。「建物などの修復費用獲得には、安定した集客が必要となる。コロナ過の収束後は、年間1万人ペースの利用を目指したい」と県キャンプ協会の園部高生会長(49)。今夏、メイン施設に「レーモンドコーナー」を設け、その理念が生かされたキャンプ場としてPRしていく方針だ。

【写真・リリーアカデミーキャンプセンター提供】

